

実践報告

地域における音楽共有の場づくりの実践報告

—2003年度後期日本女子大学西生田生涯学習センター公開講座
「午後のサロン：時代小説の話とピアノ・コンサート」を通して—

林 香 里

Practice Report of Making the Opportunities to share the Music among Community
—through the series of Open Classes in the Nishi-Ikuta JWU Lifelong Study Center ;
Afternoon salon—the Lectures of historical novels and Piano Concerts

Hayashi Kaori

本稿の課題は地域における音楽共有の場づくりの実践報告とその目的の吟味である。当課題は生活と音楽の両側からの事情から問われる。生活の側からはますます多様化する問題に対して一旦それを相対化する社会的な場としてであり、音楽の側からはジャンルの多様化、再生機器の発達および商業化の傾向によって分断された聴衆の共通項を再び創り出す場として問われる。しかし本稿においてはとりわけ前者の側からの当活動の吟味を行う。何故なら生活にとっての当活動の意義は演奏者による発信の対象を規定する故、演奏そのものの前提をなすからである。そこで求められる条件は、周期性・低価格性・公開性・知名度の高いクラシック曲による選曲・生演奏である。つまり一般的な広がりを持つ曲目を生演奏で且つ日常生活に組み込みやすくすることである。その結果受講生からクラシック音楽の身近さが改めて認識できた等、生活の中に音楽を取り入れる喜びの反応等が返ってきた。

キーワード ピアノ、生演奏、クラシック、日常生活、場づくり

1 問題の所在

本稿の課題は、日本女子大学西生田生涯学習センター（神奈川県川崎市多摩区西生田1-1-1、以下センターと呼ぶ。）での公開講座「午後のサロン：時代小説の話とピアノ・コンサート」（2003年9月～2004年3月）の実践報告と、60代以上を中心とする受講生の生活の側からの当活動の位置付けについての考察である。これらの課題は次のことから生じる。まず、当活動の目的は音楽共有の場を生活の拠点である地域につくることである。そ

の試みの一つとして公開講座は位置付けられる。その実践を振り返ることによって、当活動の目的について吟味したい。

そこでは次の事柄が問われる。すなわち生活の拠点としての地域における音楽活動の意義を示した上で、各対象（地区・対象者）が位置付けられなければならない。

最初に生活の拠点としての地域における音楽活動の意義について。このことが問われるのは現代における生活一般と音楽一般との相互的な事情か

らである。第一に生活一般が音楽一般を希求する根拠について。現代において生活を取り巻く問題は無限に多様化し、まさにそのこと自体が現代の問題を特徴づけているといえよう¹⁾。このことは、問題の解決者がそれまで以上に広範な領域を見渡す必要の他に、次のような態度を要求していることを意味する。すなわち、様々な問題に直接向き合っている日常生活から一旦距離を置き、非日常の視点から日常生活を相対化することを必要とすることである。そのとき音楽活動は重要な位置を占める。というのは、芸術活動一般はその自己目的的性格から日常生活の相対化に対して有意義であるが、とりわけその中でも音楽は時間芸術であるために、その自己目的的性格を集約的に担うからである²⁾。つまり、生活で繰り広げられる諸活動一般が問題解決を目指して常に「いま」が「これから」へと向けられているのに対して、音楽活動においては「いま」の目的はまさに「いま・ここ」の充実そのものに向けられるのである。そのことによって、日常生活において常に「これから」への方向に向けさせられる「いま」は、一旦距離が置かれ相対化されるのである。その意味で当活動は、音楽活動によって日常生活を相対化する場を地域に創り出す社会福祉の運動として位置付けられよう³⁾。以上が生活一般が音楽一般を希求する根拠である。第二に音楽一般が生活一般を希求する根拠について。現代において音楽一般は音楽が音楽であることの危機に立たされている。というのは、再生機器の進化とジャンルの多様化によって聴衆が分散化され、その根源的性格である共有性が脅かされているからである⁴⁾。このことは現代において音楽一般が、それ自身を成り立たせている基盤である人間の生活の側への注目を希求していることを意味する。以上の生活と音楽との相互的な事情から生活の拠点である地域における音楽共有の場づくりが課題として問われるので

ある。

しかしながら本稿では差し当たり生活の側からの当活動の目的の吟味に限定したい。それは、報告者の発信側（演奏者側）としての立場からである。というのは、生活の側にとっての音楽共有の場づくりの意味は、どのような背景を持つ人たちに何を発信するのかを、曲目・日時・会場の環境整備等全てのレベルで規定するからである。そしてそれは演奏の前提をなすものである。よって、本稿では当活動の目的の吟味を差し当たり生活の側からの吟味に限定する。

その際、西生田周辺地区において60代以上の受講生（2003年現在）を対象として注目することはそれぞれ次の理由から示唆的である。まず西生田周辺地区を対象にする意義について。当地区は1960年代後半から都心のベッドタウンとしての機能を典型的に果たしてきた⁵⁾。つまり当地区の発展は都心部でのそれとの対として捉えられる。このことは現代の生活の問題を考える上で示唆的であろう。

次に対象として60代以上の受講生に注目する意味について。このことは生活にとっての音楽の意義について考えるとき示唆的である。それは当年代住民にとっての以下の現代的事情からである。すなわち当年代住民は定年退職等を機に昼間人口に新入し、日常生活をどう組み立てるのが全面的な課題となる年頃であることである。それに加えて当講座が60代以上の受講生によって多く占められ、また他の講座に比べ男性が多かった結果（4-1-1参照）も注目する理由の一つである。さらに当地区では宅地の造成年に居住開始年が集中するため、今後当年代人口の大幅な増大が予想される。これら当地区当年代住民の現段階の位置は、当地域史を新たな段階に入らせる契機となるかもしれない。すなわち、これまでのベッドタウンとしての機能に加え（或いは変わり）、文化活動の拠点

としての要素が期待されるという段階への契機である。つまりその年代の住民は当地区の現在に対してこれから先の当地区の在り方を左右する重要なメンバーとして位置付けられるかもしれない。以上の理由から西生田周辺地区にて60代以上の受講生を対象として注目することは示唆的である。

かくて本稿で問われる論点は以下のものである。第一に (2) 実践の背景として (2-1) 音楽活動をめぐる当地区の現状が次の点から示されるべきである。すなわち、人口規模・構成などを始めとする対象地区の諸要素および当地区における音楽活動を巡る現状である。(2-2) さらにそこで示された現状の意味が示されるべきである。第二に (3) 実践の報告である。そこでは (3-1) 実践の概要と (3-2) 個々の実践のねらいが示されるべきである。第三に (4) 実践への反応として (4-1) 反応の提示と (4-2) 反応の評価が示されるべきである。そして最後に (5) 本稿で明らかにした

ことと、残された課題が示されるべきである。

2 実践の背景—当地区の音楽活動を巡る現状

ここでは実践の背景として当地区の (2-1) 現状の把握と (2-2) 位置付けが提示されるべきである。前者については (2-1-1) 当地区の状況と、(2-1-2) 音楽共有の場を巡る現状が示されなければならない。

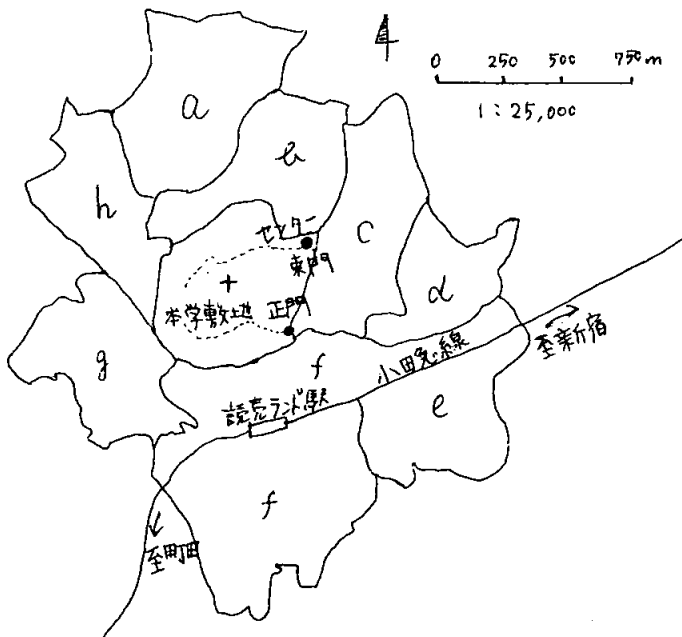
2-1 当地区の現状の把握

2-1-1 当地区の状況

(1) 対象地区：範囲の基準は本学の敷地中心点(地図の中の+)から半径約1kmの徒歩圏に設定した。

a 菅北浦4・5丁目, b 菅馬場3丁目, c 寺尾台1・2丁目, d 生田6丁目, e 栗谷1・3丁目, f 西生田1・2・3・4丁目, g 多摩美1・2丁目(麻生区), h 菅仙谷3丁目(以上多摩区)

▽ 対象地区図：線路沿いの谷地を挟んだ坂の多い地形である。



(2) 人口規模

表1 人口規模 (2003年10月1日現在)

	a 川崎市	b 多摩区	c 麻生区	d 当地区
1. 人口 (人)	1,293,618	202,042	147,993	24,942
2. 人口動態 (人)	11,710	1,348	1,404	-
3. 当地区人口 (人)	-	21,052	2,665	-
4. 当地区人口 (%)	1.93	12.34	1.80	-

出所：a, b, c, d - 1 「21 町丁別世帯数及び人口」、a, b, c - 2 「18 区別人口」、(川崎市 2003 a)

(3) 人口構成

表2 人口構成 (2003年10月1日現在)

	a 川崎市	b 多摩区	c 麻生区	d 当地区
1. 65歳以上人口 (人) ※(1)	178,293	24,437	22,079	2,994
2. 総人口に対する割合 (%)	13.78	12.10	14.92	12.00
3. 昼間人口 (人)	1,097,090	145,416	102,953	12,667 ※(2)
4. うち非就業者 (人)	570,508	99,135	69,140	9,002
5. 非就業者の昼間人口に占める割合 (%)	52.00	68.17	67.16	71.77

出所：a, b, c - 1 「23 区別年齢各歳別人口」(川崎市2003 a) a, b, c, d - 3.4 「町丁別、昼間人口・夜間人口及び昼夜間人口比率」(川崎市2003 b) ※ (1) 町丁別の各歳別人口統計が入手不可のため65歳以上のデータを示す。
 ※ (2) 当地区のうち、西生田1丁目に関しては本学通学・通勤者の為に昼間人口が突出しているため、各データを他の丁の平均と均して算出する。

表2のd-2より、当地区の65歳以上人口の占める割合は多摩区麻生区各区全体よりもそれぞれ0.1%・2.92%下回る。一方同表d-5より非就業者の昼間人口に占める割合は各区全体よりもそれぞれ3.60%・4.61%上回る。後者はベッドタウンとしての当地区の性格を示しているのであろう。当活動が対象とする住民層として今後もこのデータの動きに注目したい。

2-1-2 当地区における音楽共有の場の現状

2-1-2-1 音楽共有の場として取り上げる場所とその根拠

60代以上の住民の視点を中心にして当地区での

身近な音楽共有の場の現状として注目するのは①喫茶店・②老人憩いの家・③センターである。以下はその根拠である。①喫茶店は直接音楽を共有する目的とする場所ではなく演奏がされている訳でもないが、BGMがあること・一定時間その場所に座る事・比較的安価な利用料であること・一般開放されていることから、②老人憩いの家は在住地・年齢の条件があるが、定期的に音楽活動が行われていること(講座形式)・基本的には無料開放されている(一部の講座は有料)ことから、③センターでは、定期的に音楽活動が行われていること(講座形式)・一般開放されていること・

比較的安価な利用料（他の一般的な会場でのコンサートは約3,000円以上である）であることから各々地域での音楽共有の可能性を持つ場として位置付ける。他に音楽活動が行われる場所としてカラオケ店があるが、個室に入って歌うため地域に向けての公開とは逆の志向である。よって地域における音楽共有の場として取り上げない。また、町内会・小中学校を拠点とする地域での活動は任意ではあるものの入会・属性などを前提とすることから本稿では取り上げない。

2-1-2-2 各場所での音楽活動状況（表3参照）

ここで示すべき事項は各場所での音楽活動内容、場所、利用日時、利用料、利用状況である。

2-2 当活動にとっての現状の位置（表4参照）

ここで示すべき点は以下のものである。すなわち先に挙げた音楽活動を巡る各状況を、音楽共有

の諸条件の観点から位置付けることである。すなわち音楽を一般的に共有する条件－すなわち定期性・低価格性・公開性・選曲の一般志向性・生演奏形式－から見た各状況の位置付けである。以下はその一覧と説明である。

aについて。活動はそれぞれの嗜好毎にジャンル分けされている限りで一般性とは逆の志向のため無印にした。bについて。ここでは有名曲ベートーヴェンの第九を練習する講座とオペラを対象とする講座がある。前者について。有名曲が扱われているという限りで選曲は一般性を持つ。しかし講座全回を通して一つの曲（の演奏）に取り組むプログラムであるため受講生にとっては一般的なレベルを超え、やや専門に近い関心が要求されると言えよう。従って無印にした。後者について。オペラは一部良く知られた曲があるにせよクラ

表3 当地域における音楽活動の場の一覧（本講座を除く）

	①喫茶店	老人憩いの家	センター
件数	6店	3件(各2~4講座あり)	1件(2講座)
場所	それぞれ駅から徒歩0~10分程度	「菅」菅北浦3-11-1(5講座) 「錦が丘」栗谷3-28-2(2講座) 「南菅」菅馬場3-26-1(6講座)	西生田1-1-1 (駅から徒歩15分)
内容	喫茶、BGM鑑賞	歌唱、演奏の講座	歌唱、鑑賞の講座
ジャンル	Jポップ、セミクラシック、クラシック	歌謡曲、民謡、その他	クラシック
日時	ほぼ毎日(週一回程度の定休日以外)	週一回(10・13時から90~120分)	各計6回
利用料	180~525円(コーヒー代)	基本的に無料(一部有料)	1,000円
利用条件	なし	川崎市在住、60歳以上	なし

表4 当地域における音楽活動の場と各要素の状況（本講座を除く）

	定期性	低価格性	公開性	選曲の一般志向性	生演奏
喫茶店	○	○	○	一部○	
老人憩いの家	○	○		(a)	○
センター内音楽講座		○	○	(b)	○

シックの中で最も大衆的に受容されてきたわけではない（大正時代に流行した浅草オペラの一時期を除いて）ので無印にした。また喫茶店の選曲の一般性を挙げたのは特定の世代に関心を限定したもの（Jポップ等）以外の曲（クラシック、セミ・クラシック）についてである。

以上の状況から当地区における音楽共有の場の状況について次のことが言えるかもしれない。すなわち個人々の関心に即した音楽享受をコンサート料金に比べると比較的low価格で定期的に楽しむ場が、数は限られているとは言え当地域にはあるということである。しかし音楽共有の観点から見た場合、表から次のことがさらに求められている

といえる。すなわち、選曲の一般志向性と生演奏形式との両立である。

3 実践の報告

ここで示すべき事柄は以下のものである。第一に（3-1）当活動の概要とそのねらい又は説明、第二に（3-2）当活動の目的の具現化を促進させるために行った各実践である。

3-1 活動の概要とそのねらい又は説明

3-1-1 活動の概要

以下は活動の概要（表5参照）及び更なる詳細として演奏曲目の一覧（表6参照）である。

表5 活動の概要

形式	センターで公開講座の一コマの一部を担当する形式		内容	講義（幸津氏担当）80分、休憩10分、ピアノ・コンサート（報告者担当）30分計120分のジョイントプログラム企画。
場所	センター内ホール（グランド・ピアノ備え付け）			
日時	2003年度後期。毎週月曜14:30～16:30。但し、年末・年始・学期の最初の期間・大学の行事日（学園祭など）は休み。			
実施日	2003年9月29日、10月6・20・27日、11月10・17日、12月1・8・15日、2004年1月19・26日、2月9・16・23日、3月1日。			
選曲基準	19世紀のポピュラーなピアノクラシック曲が中心（曲目は表6参照）	料金	1,000円（各回徴収、15回セットで14,000円）※	
広報	講座全体の広報として媒体はパンフレット（センター発行）・周辺地域への新聞広告・大学玄関前の掲示板・ホームページである。対象と各規模：①パンフレット1200部を過去の講座登録者へ郵送する。また同パンフレットを本学西生田キャンパス大学正門・東門に設置し本学西生田キャンパス大学正門・東門に設置し希望者に配布してもらう。②小田急線「成城学園前」駅周辺地域9,100部新聞への折り込み広告をする。③当センターおよび本学目白生涯学習センター共同発行で関東圏6,500部に新聞広告する。④本学西生田キャンパス大学正門・東門の計2箇所に掲示板を設置する。講座当日に各講座名が貼り出される。			
			演奏者の待遇	一回3,000円

※講義のテキスト代1,610円（購入は自由）である。

表6 演奏曲目：各回冒頭で午後のサロンテーマ曲として「愛の挨拶」（エルガー1900年）を演奏した。（T:その回の講義テーマのテーマ曲）

9/29T: G線上のアリア(バッハ1736年) / エリーゼのために(ベートーヴェン1810年)、ユーモレスク(ドヴォルザーク1894年)、舞踏への勧誘(ウェーバー1819年) ②10/6T: 同 / パルティータ第1番(バッハ1726年)、華麗なる大円舞曲(ショパン1831年) ③10/20T: 同 / ピアノソナタ「月光」(ベートーヴェン1801年)、愛の夢第3番(リスト、1847年) ④10/27T: 月の光(ドビュッシー1905年) / イタリア協奏曲(バッハ1734年)、ソナタ第37番(ハイデン1780年) ⑤11/10T: 同 / 黒鍵のエチュード、小犬のワルツ(ショパン1830、1846年)、キラキラ星変奏曲(モーツァルト1785年) ⑥11/17T: 同 / 英雄ポロネーズ(ショパン1842年)、枯葉(歌、幸津國生氏)、即興曲第15番「エディット・ピアフに捧ぐ」(プーランク1959年) ⑦12/1T: シンリエンス(フォーレ1893年) / ピアノソナタ(トルコ行進曲付)(モーツァルト1783年) ⑧12/8T: 同 / 革命のエチュード(ショパン1831年)、子供の情景(シューマン1838年) ⑨12/15T: ノクターン作品9-2(ショパン1832年) / プレリュードハ長調(「平均律クラヴィア曲集第1巻」より)、主よ人の望みの喜びを(バッハ1722年作曲ヘス1922年編曲)、クリスマス週(「四季」より)(チャイコフスキー1875-1876年)、アメージング・グレイス(Traditional 藤井英一2000年編曲) ⑩1/19T: 同 / 春の海(宮城道雄1929年)、美しく青きドナウ(シュトラウス1867年) ⑪1/26T: ラルゴ(ヘンデル1738年) / 幻想即興曲(ショパン1834年)、ノクターン作品62-2(同1846年) ⑫2/9T: 同 / 乙女の祈り(バグジェフスカ1856年頃)、金婚式(マリー1800年代後半?)、結婚行進曲「真夏の夜の夢」より(メンデルスゾーン1843年) ⑬2/16T: 調子のよい鍛冶屋(ヘンデル1720年) / タンホイザー大行進曲(ワーグナー1845年)、カヴァティーナ(ラフ1800年代後半)、タイスの瞑想曲(マスネ1894年) ⑭2/23T: 同 / 夢想(ドビュッシー1891年)、ジムノペティー第1番(サティ1888年)、亡き王女のためのパヴァーヌ(ラヴェル1899年) ⑮3/1T: 同 / 亜麻色の髪の乙女(ドビュッシー1910年)、花のワルツ(チャイコフスキー1892年)、別れの曲(ショパン1827年)

3-1-2 各概要のねらい又は説明

形式と場所について。大学の主催する公開講座ということで住民にとっては安心して知的(美的)な営みにチャレンジすることを促すかもしれない。内容について。講義とコンサートのジョイントにより、知的な営みと美的な営みが相互に引立つかもしれない。日時について。まず活動サイクルについて。基本的に毎週規則的に行うことで受講生の生活に講座を組み込みやすいであろう。半期(6ヶ月)に15回の頻度は、大学の学期と対応している。次に曜日について。日常生活であるウィークデイが始まる最初の日⁶に知的な活動を少しと楽しむの音楽の時間を持つことによって一週間の生活のサイクルにはずみがつくのではないかと、ということからである。さらに時間帯について。開始時刻は受講生にとって昼食が終わってゆったりした時間であること、終了時刻は帰宅した後夕食までにその準備が出来、真冬でも真っ暗にならない、よって一日全部を拘束された感じがしないこと、それでいながら、たっぷりとその時間を楽しめる長さであることにある。選曲基準について。現代日本の中でポピュラーに受容されていると思われるものとして19世紀を中心としたピアノ・クラシック音楽に重点を置いた(表6参照)。

その理由としては次の二点が当然問われなければならない。すなわち第一に、ヨーロッパのピアノ音楽史のなかでのそれらの曲の位置、第二に、日本の西洋音楽受容史にとってのその時代のピアノ曲の位置である。しかしながらこれらについての主題的な展開は次稿に譲らざるを得ない。ここではただ日本で幅広く愛好されたピアノ曲の中に19世紀に作曲された曲目が多く蓄積されていること⁶⁾と、楽器としてのピアノの西洋音楽受容史における役割の大きさ⁷⁾についてのみ触れておきたい。これらの事柄は、日本人の音楽受容にとっての楽器としてのピアノ、およびピアノ曲の存在の

大きさを垣間見させるものと思われるのである。よって、このような位置を占める19世紀のポピュラーなピアノ・クラシックを本講座のコンサートで取り上げる意義は大きい。それによって、聴く側にとっては、我々が日頃受容している文化がどこから来て、そしてこれからどこへ向かうのかに思いをはせることが出来るかもしれない。また実際には知名度が低いと予測される曲も一部取り上げた。しかし知っている曲(歴史)とそこでとり上げる曲との関連を演奏前に説明した。つまりあくまで知っていることから新たな領域へと関心が広がる流れになるよう配慮した。これによって音楽の生活の中への定着が一層促されるかもしれない。料金について。この値段の設定は当センターの規定によるものであるが、地域での音楽共有の場づくりという当活動の趣旨に叶うものでもある。つまり、高すぎることなく、且つ無償でもない値段である。高すぎれば、日常的に通うのを躊躇するだろうし逆に無償だと受講生の意欲促進の点で有効であると思われる⁸⁾。また、一回ごとの徴収は受講生を拘束しないため有意義である。さらにそれは受講生が一回ごとに主体的に出席する条件をもつっている。広報について。センターが業務として全公開講座広報の一環で行われたものである。演奏者の待遇について。当センターより一回3,000円の謝礼が支給された。これは、これまでジョイントでの企画の前例がなく複数の講師への謝礼を渡せないということ、しかし講座が有料で行われつつ演奏者が無償で出演した場合、学校側から出演者への労働搾取の問題が生じるためセンター規定の交通費の上限3,000円が謝礼として出演者に支払われるという背景があるとのことである(2003年度当時センター長談)。

3-2 当活動の目的の具現化を促進させるために行った各実践

以下は諸実践一覧である。

(1) 開始時刻の厳守／(2) 草花の設置／(3) 人口樹木二鉢設置／(4) 普段着での演奏／(5) 最終回に茶菓子を提供／(6) 職員の方と主催者との連携／(7) 受講生との交流への配慮

(1) は全ての受講生の日常生活に安定的に本講座を採りこんでもらうためである。(2) 徒歩にてセンターへ移動する途中に見つけた落ちていた草や枝を毎回講義台に飾った。このことは、受講生にとって講座提供者への構えを解いてもらえることになるのではと期待して行った。つまり、提供者である我々はこの時間この場所に単に商品として現れるのではないと言うことである。我々にも、受講生の皆さんと同じように日常生活があり、そこで見つけたささやかな潤いを皆さんと謹んで共有したいという姿勢を示すものになる、というねらいである。(3) 人口樹木はやや殺風景なホールに潤いを添えるための工夫で講座開始前にセンターに購入を要請したものである。(4) 音楽が日常生活の中により当たり前に風景として溶け込ませたいという願いがある。また、演奏者自身にとってそのことが毎回の準備の負担を軽減し、より当たり前に日常生活のこととして活動したいという意図もある。(5) お菓子の費用は講師が負担した(10,500円)。お菓子は、悪天候であったこともあり持ち運びにはややかさばったが当日は雛祭りの日に近かった(3/1)ため、ひなあられを選んだ。(6) 講座開始前の2回にわたる事前の打ち合わせ、および開催中のトラブル処理において職員と主催者(講師、演奏者)との連携の他、主催者が受講生に向けて実施したアンケート結果の共有を行った。会場設営の打ち合わせは講師・職員・演奏者の三者で行った。このことは当活動の目的を実現する雰囲気や職員も含めた主催者側が共有する上で重要なプロセスである。会場準備については例えば以下のようにそれらを行った。講

座受講生が会場に入ったときになるべく本講座が受講生にとって身近な、出来れば心地よい印象を持ってもらえるように、テーブル、椅子、演台、ホワイト・ボード、グランド・ピアノの設置位置を三人一緒に試行錯誤して考えた。たとえば、受講生が入り口のドアを開けて初めてこのホールに入った時の気持ちを思い浮かべた。何がここで行われるのだろうかと言う期待と不安があるだろう。そんな時に講演台とピアノの位置は特に配慮されなければならない。なぜならそれがこの講座の内容のキーワードを示すものであり、これから来られるであろう受講生と我々を現段階において唯一つなぐものだからだ。両者は見る側にとってまとも良く、かつ相互の間隔が窮屈になり過ぎないように配置すべきである。また、受講生にとって講師および演奏者とはそれぞれどのぐらいの距離を設けたらいいだろうか。近すぎると、講師のみ、あるいはピアノのみしか受講生の視野の中には入らなくなってしまうだろう。適度な距離を持って講演と演奏が受講生の視野の中にバランス良く入るのがベストである、などを主催者と職員の方とで話し合いつつ配置した。このように主催者側がよりよく受講することができるように条件を整えるプロセスを持った。次に講座開催中に生じたトラブルの対応について。受講生からプロジェクターの光量が不適切であると言う苦情に対し職員の方に迅速に対応いただいた。このことは当活動を推進する上で欠かせないことである。なぜなら当活動は実際に講座を実施していく上で伴う技術上の問題点(主に機械の操作など)の克服無しには、まったく叶わないことだからである。このことは技術上の点ばかりではなく、事務職員の方の講座への日ごろからいただいている協力全般に当然の事ながら言えることである。またアンケート回答は即座に職員の方と共有した。これにより日ごろ活動を支えてくださる方々と講座の目

的を一層共有したいという願いがある。(7) 各種アンケートを実施した。これによって受講生が講座を受講するだけでなくそこで得た感想を主催者側に戻すルートをつくる意図がある。

4 実践に対する反応

ここで示すべき事柄は次の二点である。すなわち第一に(4-1)反応、第二に(4-2)当活動の目的にとっての反応の意味である。これらの枠組みについてはその前提に制約があることは否めない。つまり両者は完全に区別することは出来ないことである。というのは、ある事柄を反応として拾い出す時点で既にそこには報告者の評価が入っているからである。特にアンケート以外の方法で得た反応(として注目するもの)はその度合いが強まる。にもかかわらずこのように示すのは次の理由からである。すなわち、少なくともそこでは報告

者が反応として拾い出した事柄又はその事柄としての位置付けした内容を特定するためである。そしてそのことは当活動の目的を吟味する上で欠くことが出来ない。よってここでは反応と当活動の目的にとっての反応の意味が示されるべきである。

4-1 反応

ここで示すべき反応の項目は(4-1-1)受講状況、毎回のアンケート回答数、年齢構成、(4-1-2)リピーター度、(4-1-3)当地区在住受講生の割合、(4-1-4)毎回以外のアンケート回答の各数、(4-1-5)内容別アンケート回答数、(4-1-6)アンケート以外による反応の内容である。

4-1-1 受講状況、毎回のアンケート回答数、年齢構成

各回の受講状況、毎回のアンケート回答数、年齢構成は、表7・8のとおりである。

表7 受講生の構成およびアンケート回答数

回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	平均	登録者数
日付	9/29	10/6	10/20	10/27	11/10	11/17	12/1	12/8	12/15	1/19	1/26	2/9	2/16	2/23	3/1		
男性	人 12	人 12	人 9	人 8	人 10	人 9	人 9	人 9	人 9	人 8	人 8	人 8	人 9	人 9	人 7	人 9	人 14
女性	人 30	人 32	人 23	人 17	人 18	人 14	人 10	人 19	人 17	人 19	人 14	人 13	人 15	人 15	人 14	人 18	人 45
総数	人 42	人 45	人 32	人 25	人 28	人 23	人 19	人 28	人 26	人 27	人 22	人 21	人 24	人 24	人 21	人 27	人 59
回答数	件 18	件 7	件 4	件 2	件 1	件 2	件 0	件 1	件 16※	件 0	件 1	件 0	件 0	件 1	件 2		

※この回のアンケートは、通常のアンケートよりも質問事項を細かく設けて実施したものである。

表8 受講生の年齢構成(2/23実施のアンケート回答より※)

	30代	40代	50代	60代	70代	無回答	計
男(人)	0	0	0	5	0	0	5
女(人)	1	1	2	5	3	0	12
無回答(人)	0	0	0	0	0	4	4
計(人)	1	1	2	10	3	4	21
(%)	4.76	4.76	9.52	47.62	14.29	19.05	100.00

※この回のアンケートのみ受講生に任意回答で年代を尋ねた。

第3回時以降は受講生数が減少し、第4回時以降はほぼ一定になっている。また全体の受講生数の減少と同時に相対的に男性の受講生比が高い。これは当センターの標準よりもかなり高いものである⁹⁾。また年齢構成は60代が中心である¹⁰⁾。

4-1-2 リピーター度

本講座のリピーター度（3分の2以上出席者）は以下のとおりである。（表9参照）

表9 リピーター度（3分の2以上出席者）

	男性	女性	総数
人	7	14	21
%	50.0	31.1	35.6

4-1-3 当地区在住受講生の割合

当地区在住受講生の割合は以下のとおりである。

表9より男性のリピーター度が女性のそれより高い。（本講座は15回と回数が多かったため、全体の3分の2以上の出席率は基準が高いものと思われる。）表10より、当地区在住の受講生のリピーター

になる割合は当地区以外在住の受講生より高い。また実数の上では当地区在住のリピーター数は全体のリピーター数のうち過半数をやや上回る。

4-1-4 毎回以外のアンケート回答数

毎回以外のアンケートへの回答数は以下のとおりである（講義の内容についての感想を含む）。

第14回時実施のアンケートは受講生の音楽体験を尋ねるもので長文にもかかわらず高い回答率であった。

4-1-5 内容別アンケート回答数

受講生による本講座への感想の内容項目別内訳は、講義について（質問・感想）が62件、コンサートについて（感想・リクエスト）が38件、企画全体について（感想・意見）が11件であった（複数項目回答有で延べ数）。（ここでは受講生自身の音楽体験を別個に尋ねたアンケートの回答は除く。また、受講生の感想のうち講義についてものは分析対象から除く。）さらにコンサートへの感想内容別内訳は次のとおりである。

表10 当地区在住の登録者状況

	a 当地区在住	b 当地区リピーター (再掲)	c 当地区以外在住	d 当地区以外 リピーター (再掲)	e 総数
人	15	8	44	13	59
%	25.42 (a ÷ e)	53.3 (b ÷ a)	74.58 (c ÷ e)	29.55 (c ÷ d)	100.00

表11 その他のアンケート回答数

	音楽受容についてのアンケート (14回時に実施) ※1	全講座終了後の講義感想 (04.4/3現在) ※2	全講座終了後コンサート感想 (04.4/3現在) ※3
数	22	5	4

※1 このアンケートは、通常のアンケートと別個に、受講生の音楽受容についての質問を設けて実施した。

第14回時にアンケートについての説明と配布をし、第15回時に回収する旨をお知らせした。

※2 講座の最終回の受講生に感想を寄せるはがきを配布し返送されてきたものである。

※3 第14・15回時受講生に、音楽受容についてのアンケート集計をフィードバックした。その際、集計結果・更なる受容にまつわるエピソードなどを募る返信用はがきを同封したものである。

コンサートへの感想内容別内訳

- a 曲についての感想・リクエスト …15件
- b 「良かった、心豊かなひとときを過ごせた」
等 …12件
- c 「ピアノ曲あるいはクラシック曲への再認識
の機会になった、ピアノ曲が好きになっ
た・興味をもつようになった」 …7件
- d 「演奏前の解説がよかった」 …4件
- e 「選曲がよかった」 …3件

4-1-6 アンケート以外による反応の内容

アンケート以外の反応は、以下の機会に得たものである。すなわち、講座（演奏）開始および終了後直接主催者へ口頭によって返されたもの、センターの年次報告の一環として当講座の感想文として表現されたものなどである。以下はその代表的な内容である。

- a 演奏後（講座終了後）の反応として「うちの息子が昔トルコ・マーチをよく弾いていたのを思い出して懐かしかった」（50代～60代の女性）があった。
- b 講座の開始前に「ここ一週間（先週演奏した）『月光ソナタ』が頭にずっと響いていたの」（70代女性）と演奏者に声を掛けられたこと。
- c 「『1つのテーマを選び、ある程度長い間継続する講座であれば腰を据えてまとまった学習が出来るのではないかとの私の期待に合致』し当講座を選択した。『日々の自分のスケジュールをきちっと管理し出席できるようにすることも学習に求められたファクター』と考え、全回を通じて通うことで生活にリズムをつけたいと思った」、という感想文があった（60代男性、センター年次報告未発行）。

- d 全講座終了後、受講生に送付したアンケート集計結果に、「ポストを見ましたら、先生のお手紙が入っていてポーとあかりがついた様なうれしさでございます。」（70代女性）という返信があった。
- e その他職員の方からアンケート結果送付のお礼のメッセージが学内便にて届けられた。

4-2 当活動の目的にとっての反応の意味

ここで示すべき事柄は、当活動の目的一地域における主に60代以上住民の音楽共有の場づくりにとっての4-1で示した反応の意味である。その際各反応は次の視点からそれぞれ位置付けられよう。第一に（4-2-1）受講生の受講状況の視点から、第二に（4-2-2）受講生の反応内容の視点からである。

4-2-1 受講生の受講状況の視点から

最初に受講状況の視点からについて。当講座では男性の受講生の定着度が高かった（受講生の総数もこれに対応して多かった）。このことは当活動の目的にとって積極的な意味がある。なぜなら平日の昼間をどのようにして過ごすかは一般的には退職後の男性の側にとって大きな課題になるであろうと推測されるからである。当講座がそのような課題を持つ層にとって生活の一つの拠点になることが出来たとすれば有意義である。

4-2-2 受講生の反応内容の視点から

次に反応の内容の視点からについて。ここではアンケートによる反応（4-1-5）およびアンケート以外によるコンサートへの反応（4-1-6）に即して示されるべきである。

最初にアンケートによる反応について。4-1-5のc,dは当活動への反応を特に特徴付けている。以下はそれらの更なる内容である。

- | | |
|---|----|
| ①「(クラシックが) 今回のサロンで意外と町に流れる音楽と分かった。」 | …c |
| ②「トルコ行進曲の由来を聞き新たな気持ちで聴きました。」 | …c |
| ③「モーツアルトのソナタ (トルコマーチ付) を全曲聴けてよかった。」 | …c |
| ④「曲目の簡単な解説をして頂いてから演奏に入りますが、この解説が楽しい。ただ演奏を聞くだけではないので。」 | …d |

これらは演奏への直接の感想ではなく、一見音楽に直接関係のない内容であるかのようなものである(①④など)。しかしながら、そのことは次の意味で重要である。すなわち受講生は個人的な音楽の嗜好を超えて当講座を楽しんだと思われることである。勿論もともと個人的にクラシック音楽を好む層の可能性を無視するわけではない。しかしここでは曲の時代背景や曲の全容(有名な「さわり」だけでなく)に触れることそのこと自体を楽しんでいるように思われる(③④など)。それによって単に音楽だけを聴くのではなく、あるいは知らなかった曲を新たに知るだけでなく、その音楽が作られた時代背景としての「むかし」(およびその「どこか」と「いま・ここ」の自分とのつながりを見出すこと、或いはつながりを新たにすることの喜びが表れていると思われる。(②など)そのことは、当活動の趣旨の一つである選曲の一般性への志向に対する一定の反応として評価できる。

次にアンケート以外による反応について。4-1-6で示した内容は、当活動のもう一つの趣旨定期性への一定の反応として評価できる。というのは上述の反応は様々なスパンが重層的になって返されたものである。すなわち講座(演奏)終了直後・1週間後・全回終了後・アンケート集計結果返送後のスパンにおいてである。このことは音楽

共有の場づくりにとって次の点で有意義であると言える。つまり当活動は定期的に行うことによって主催者側からの働きかけ(講座)に対する受講生の反応を受け止める機会を確保した点においてである。受講生にとってはどのような内容であれ主催者から発信されたことに対して何らかの感想をもち、それを主催者側へ返すことによってその回は一旦完結することが出来よう。そしてその小さな完結の循環を重層的に積み重ねることによって受講したことへの充足感を得られよう。またそれは同時に音楽共有の場が豊かに且つ安定的に創られたことも意味すると思われる。さらに4-1-6のcに示される感想はある程度まとまった期間の定期的な活動への反応として評価できよう。

また講座中の受講生からの直接の反応(4-1-6のa, b)は生演奏のインパクトによる部分が大いと思われる。よって当活動の演奏形態への一定の反応として評価できる。最後に職員の方からのアンケート結果送付への礼状(4-1-6のe)は、主催者と受講生との間に留まらず主催者と職員の方とのやり取りの完結が出来たことを示している。これによって全ての当活動が最終的に完結したことになる。

5 残された課題

残された課題は次のものである。最初に現状の問題(第2章)については当地域住民の文化的ニーズ調査の統計、当地域の歴史的背景、各統計の歴史的推移の分析である。次に実践の報告(第3章)について当活動を大学機関で行うことの意義の展開、そして反応の提示(第4章)においては返ってきた反応の更なる詳細な分析がそれぞれ求められる。また当活動のもう一つの側面の課題として、音楽の側から見た当活動の位置も問われるべきである。

資料一アンケート質問項目（反応を報告した分について）

(1) 毎回のアンケート：「お名前／公開講座『午後のサロン－時代小説の話とピアノ・コンサート』／ご感想・ご意見・ご質問などを、どうぞお書き下さい。」

(2) 12/9実施のアンケート：「午後のサロンのアンケート／アンケートにお応え下さると幸いです。今後の会づくりに生かしたいと思います。／■前半の講義でおもしろかった、もしくはご興味があったことは何ですか。（作品名や単語でおこたえ下さっても結構です）／■後半の演奏で印象に残った曲目は何ですか。■ご質問、ご感想、ご意見、曲目のリクエスト等など何でもお書き下さい。（裏面に書いてくださっても結構です。■よろしかったらお名前をお書き下さい。／ご協力有難うございました。皆様におかれましては、良い（マ）年をお迎え下さいますように。
…担当者：幸津、林）」

題対策の関連領域の拡大（京極 2000：92）などである。このように現代における生活問題は様々なレベルで多様化重層化している。この状況のもとで問題を捉える際、一番ヶ瀬は視座の拡大の必要を指摘しており興味深い。そこでは視座の射程と態度の拡大が促されている。射程の拡大については問題を横軸的に捉えるにとどまらず、縦軸的にも射程を拡大する必要が示されている。つまり、個々の問題を別個に捉えることに加えて「個人としての問題の自覚から、社会的に生活を守り高めるための認識、さらにその運動化まで」当事者の問題認識のプロセス全体を捉えるべく射程の拡大、およびその時々の問題への注目に留まらず、生活者のライフスパンをトータルに見とおした捉え方をすべく射程の拡大である（一番ヶ瀬 1993：52）。態度の拡大においては「客観的問題の捉え方から、自分自身の問題も含めて主体的に問題を問う」態度への拡大（同 1989：372）である。つまり一見無限な問題の拡大状況に対して、それを捉える主体の態度へ注目が向けられていることは生活者の視点から問題を捉えるときには欠かせぬ要素であるので有意義である。同語反復のようであるが、それだけ現代において立ち現れる生活の問題は複雑化の様相を呈しているということだろう。

2) 音楽活動における時間の性質について前川の言及は示唆的である。そこでは行為と目的との関わりの中で音楽の時間とそれ以外の活動との時間の性質が区別されている。すなわち、一般的な活動においては行為を行う自己は常にその先の目的に規定されるのに対し、音楽体験では「自己は目的に囚われない、また外から束縛されない自由が

註

- 1) 「生活問題」としての社会問題一般の捉え方は以下の様々なレベルで生じる多様化によって特徴付けられているといえる。すなわち①問題とする事柄の拡大（一番ヶ瀬 1974：214-215、同 1989：372、京極 2000：92）、②問題当事者の属する階級の広がり（一番ヶ瀬 1964：19）、③問題として認識する主体の拡大（岩田 1999：587）、④問題の原因や不安要因の拡大（真田 1968：150-151と石川 1990：309）、⑤問

あり、そこにいるのは、解放された自律的な自己である」ということである。つまり行為自体が目的になるということである（前川 1995：90）。このような時間は芸術活動一般に見られるであろう。しかしとりわけ中でも音楽活動は時間芸術であるためにこの時間の性質が集中的に顕れるであろう。本稿ではさらにそのことの持つ社会的なレベルでの意味について実践を通して考察したい。

- 3) 生活の視点から問題を捉えなおす際の社会福祉運動、ひいてはその主体として非営利活動の重要性についての一番ヶ瀬の指摘は示唆的である（一番ヶ瀬 1989：376）。
- 4) 現代における音楽を取り巻く状況についてウルリヒの記述は示唆的である。彼は現代芸術音楽の無調性化の趨勢に対して警笛を鳴らす。つまり無調性化によって起こされる音楽美の崩壊は音楽の根源的性格にかかわり人類史的な規模での危機を意味するということである（ウルリヒ 1985：487）。確かに調性の崩壊は音楽の共有性を脅かし、その点で音楽の根源的性格に触れる問題であると言えよう。一方現代大衆音楽において調性は保たれており一見この問題から免れているかのようなのである。しかしジャンルの多様化や再生機器の発達による聴衆の分断は共通の問題をもたらしているといえよう。また音楽の商業化はそれに拍車を掛けている。
- 5) この状況についての様々な視点からの記述は状況把握の上で示唆的である。第一に土地利用状況の推移の点からは当地区の「農地の減少に対して異常なまでの総世帯数の激増」の様子がデータによって提示されている（小林 1993：276-277）。また交通史の点からは1963年から数年間は大規模団地

建設にともなう団地輸送の時期として位置付けられている（鈴木 1996：329）。また当地区のベッドタウンとしての風景描写として「丘の上から下までズラリと住宅が密集、人口過疎地だったところがウソのような眺め」と表現されている（加藤 1993：188）。いずれも当地区の短期間での急激な変化を示す記述として興味深い。また小田急線の乗降客数の推移から当地区付近のこのような変化が覗える。読売ランドまえ駅付近の急行停車駅である向ヶ丘遊園の乗降客数は1948・1955・1965・1975・1985各年の間にそれぞれ3,423、27,251、22,634、2,993人増加しており1955年から約20年間の伸び率が高い。また周辺の人口増加への対応としての新百合ヶ丘駅が1975年に新設されている。このような人口の増加の推移も当地域周辺のベッドタウンとしての役割の片鱗を示している。

- 6) 一般によく知られている曲目の選択の際、『最新名曲解説全集第14～17巻』（音楽之友社編1980）での掲載曲の他、『全音ピアノ・ピース』（全音楽譜出版社）の曲目一覧も貴重な典拠として挙げられよう。理由は、それが専門家の育成ではなく一般のピアノ愛好家にむけて編集されたと推測されることである。というのは作曲年やスタイル、演奏の難易度の秩序に関係なく、愛好された曲と推察できるものが並べられているからである。残念ながら編集者、出版年は不明であるが編集にはピアニストも携わったということである。また一部はアメリカで出版された「ラジオ・ミュージック集」の版權を得てそれを掲載した時期もあるということである（全音楽譜出版社担当者談）。このことから編集の趣旨は一般の愛好家向

けであったことが覗えよう。現在も収録は進行中で、恐らく我が国で最も歴史のある一般ピアノ愛好者のニーズを継続的に反映させた楽譜集と推測される。(ただしこの一覧も年月を経てピアノの大衆化が進むにつれ掲載される曲目の一般性も薄れる傾向にある。) この曲目一覧をベースにこれまでピアノ名曲集として楽譜、レコード、CD、CD-ROMの形で何度も編みなおされている。それは今もこの蓄積が一般のピアノ愛好者に親しまれ続けているということであろう。

7) 日本における西洋音楽受容史のなかで楽器としてのピアノは重要な位置を占める。それは国民への国家による西洋音楽普及機関としての学校音楽の現場にはピアノが必ず風景の中に収まっていることから示されよう(オルガンが配置されていた場合でもピアノ設置が其の先の目標として目指されていた)。また日本の市民社会でのピアノの位置からも示すことが出来よう。たとえば短歌に詠まれるピアノの風景描写史についてのさいとうの言及は興味深い。そこでは市民社会の中でピアノがどのようなものとして描写されてきたかの移り変わりが示されている。すなわち西洋音楽受容史初期には「西洋文化の豊かな香りを伝える代表的な素材」から戦後には「時代や思想を反映する」隠喩として、さらに現代では美しく音楽を奏でる「楽器そのものとして」扱われるということである(さいとう 1999: 543)。この変遷は、ピアノの市民社会での普及具合をも示しており興味深い。

8) 1,000円という値段が受講者から身近な価格として評価されていることに関して(赤羽 2002) 参照。また値段の感覚基準として日

常的な娯楽にかかる価格を参照する場合以下のものが例示できよう。ファミリーレストランでのランチ食分弱、フルサービスの喫茶店のコーヒー2杯分弱、映画鑑賞代1,800円、同シルバー料金1,000円などである(2004年現在)。

- 9) 2002年度前期講座受講生は男性が約12%、女性が88%であり、2002年当時では男性比を2割まで持ってくるのが目標とされている(赤羽 2002)。
- 10) 2002年11月13~19日実施の受講生に向けたアンケート(回答率71.6%)によれば、受講生の年齢構成は60・70代の受講生が最も多く全体の58.6%と言うことである(渡邊 2004: 32-33)。当講座における60・70代受講生はそれより3.31%上回る61.91%である。

文献目録

当地区関連の文献：加藤一雄1993『小田急よもやま話・上』多摩川新聞社、188／川崎市2003a『川崎市統計所』総合企画局／川崎市2003b『平成12年度国勢調査による川崎市の昼間人口』総合企画局企画部統計情報課／小林孝雄1993「迫りくる都市化の潮流」『川崎市多摩区の歴史「多摩区OLD 7ント`NEW」』川崎市多摩区役所、276-277／小田急電鉄株式会社編2003「一日平均主要駅乗降人員および取扱収入の推移」『小田急75年史』小田急電鉄株式会社、232／鈴木文夫1996「大都市圏輸送への移行」329、「あいつぐベッドタウン路線新設」331-332『神奈川の鉄道1872~1996』日本経済評論社、以上。

生活問題関連の文献：一番ヶ瀬康子1964『社会福祉事業概論』誠信書房、19／同1974「生活

問題】『社会福祉辞典』誠信書房、214-215／同1989『現代社会福祉の基本視角』時潮社／同1993『生活問題』『現代福祉学レキシコン』雄山閣出版、52／石川淳志1990『生活問題』『現代社会福祉事典』全国社会福祉協議会、308 - 309／岩田正美1999『生活問題』『福祉社会事典』弘文堂、587／京極高宣2000『生活問題』『社会福祉学小辞典』ミネルヴァ書房、92／真田是1968『生活問題』『社会福祉論』有斐閣、150-151、以上。

センター講座関連の文献：赤羽正行2002『日本女子大学における生涯学習事業について』【2002年度職員総合研修（長期強化コース）】／【2003年度日本女子大学西生田生涯学習センター年次報告】（未発行）／渡邊優子2004『日本女子大学人間社会学部教育学科卒業論文：公開講座にみる「生きがい」と生涯学習の関係性』、32 - 33、以上。

その他の文献：前川郁陽1995『音楽と美的体験』勁草書房、90／さいとうなおこ1999『ピアノ』『岩波 短歌辞典』岩波書店、543／ウルリヒ、ミヒェルス1985『20世紀／音楽観』【カラー図解音楽事典』白水社、487、以上。